



「フリーター・無業者層こそは、……現代における相対的過剰人口のもっとも典型的な形態に他ならない」のであり（橋本，2006：138-141）、そうした若者の存在は、今日の部落における就労の「再不安定化」を考える上で重要な位置を占めていると考えられるからである。もって、部落の「再不安定化」、その中心的できごととして、「貧困の固定化」「排除の蓄積」のありようを描き出す。

用いるデータは、2003年4～7月に実施された「大阪フリーター調査」<sup>(1)</sup>で聞き取られた部落の若者27人の生活史である。

## 1 環境としての生育家族—経済的困難

彼／彼女らは、どのような過程を経てフリーター・無業状態へと至ったのか。その出発点となるのは、彼／彼女らが生まれ育った家族である。

「お家の暮らしは厳しかったですか？」。27人中14人は、「しんどかった」「貧乏やった」と語った。父親（母子世帯の場合は母親）の職業には、建設作業員、トラック運転手、ガードマン、タクシー運転手、清掃作業員などの職種が目立ち、臨時雇や日雇といった雇用形態も少なくない。無業や失業中である親も6人いた。親の学歴構成は、学歴の分かる親16人中、中卒10人、高卒5人（うち中退1人）、短大卒1人と低位に偏っていた。

先行研究は、相対的に低い社会階層的背景を持つこうした若者たちが、フリーターとしてより析出されやすいことを指摘してきた（耳塚2001、2002、小杉2003など）。「経済のグローバル化にともなう非正規労働市場の拡大（パートやアルバイトによる労働力の調達傾向の高まり）」。「景気循環では説明できない構造的変化が進行する中で、最も割を食っているのはこうした若者たちである。以下、生育家族に経済的困難があったと語る14人に焦点を絞り、フリーターへと至る過程を記述していく。

では、「しんどかった」「貧乏やった」と語られる経済的困難の具体とはいかなるものだったのか。経済的困難といった場合、親の死亡、病気・ケガなどの「アクシデント」、近年の不況、こうした要因によって一時的に、あるいはある時点から経済的に困難な状態に陥るというケースも考えられる。しかし、今回の調査においてより多く見られたのは、困難の度合いに変化はあるにせよ、ある時点からというより生活史のほとんどの期間、常態的に経済的に困難・不安定な状態にあったと考えられる事例である。

（事例17）（母親はタコ焼き屋を）小学校の時から、私が高校の時までやってた…病院の前で車でやってた。…お父さんは土方をやってた…でも、糖尿でドクターストップかかったから、もう仕事はやってない。生活保護受けてるから（本人15歳頃以降）。…（それ以前も父親は）お母さんにね、これが今月の生活費やぞみたいな、これでやりくりせいみたいな感じで渡して、残りのお金は俺のみみたいな。…減茶苦茶。…【経済的には昔から楽ではなかった？】うん、そうですね。多分、お母さんと2人

の方が絶対に、まだマシやったんちゃうかなあ思う。[20歳・女性]

(事例9) (生家の暮らし向きは) まあ貧乏でしたけれどね。… (父親は) 昔はあまり働かなかったようです。…家で小っちゃい箱を作る内職をしていましたけれどね。… (土木建築の) 仕事に行きだしたのは、中学の途中ぐらい、2、3年ぐらいから…。父親はそれまで仕事をしてなかったんですよ。【その間お母さんがしっかり働いて?】働いたようです (飲食店の洗い場でパート)。お金を借りたりして色々やっていたけれどね。…【食べるものに困った経験は?】それは幸いなことにならなかったんですけど。…生活保護を受けているんで。…僕と母親と。【(離婚し別居した) お父さんは?】お父さんももらっていますね (病気で足が悪く現在は働いていない)。… (生活保護は) 親の分に関しては、多分だいぶ前というか、もうずっとやっていると思うんですけど…。[23歳・男性]

これら以外にも、多くの事例で生育家族が常態的に、あるいは相当長期に渡って経済的に困難・不安定な状況にあった／あることが語られた。例えば、父子世帯で父親は日雇の建設作業員やガードマンをしているという事例、父親は「テキ屋みたいな」ドーナツ販売など、いくつかの離転職を経て1年程前からホテルの清掃をしているという事例、両親共に日給月給やパートなどの仕事を転々とし、父親は現在無職、母親はパートという事例、両親が幼い頃に離婚し、障害を持つ母親と生活保護を受給して生活しているという事例など。また、語られただけでも3人は生活保護世帯で育った。これら常態的貧困、深い貧困と特徴づけられる経済状況の中で、彼／彼女らは生まれ、育っていくことになる。

## 2 環境としての生育家族—不安定な家族関係

彼／彼女らが生まれ育った家族が抱えていたのは、経済的な困難・不安定さだけではない。前節の事例にも示されているように、経済的な困難を抱える家族は、家族関係における困難・不安定さもまた内包しがちであった。

一人親世帯という家族構成が、社会的な不平等と強く結びついている／結びつけられていることは、これまで繰り返し指摘されてきたが<sup>(2)</sup>、経済的困難が語られた14人中9人は一人親世帯 (母子世帯6人、父子世帯3人) で育っている。また、14人中10人の親には、離婚経験があった。さらに、近代家族の伝統的イメージから「逸脱」する、次のような家族構成もしばしば見られた。例えば、16歳女性の事例である。彼女がとても広いとは言えないアパートで共に生活しているのは、母親 (40代・無職)、長女 (20代前半・無職)、長女の夫 (無職・未入籍)、長女の子ども (0歳)、次女 (20代前半) の子ども (2歳)、インタビュー対象者の彼氏 (10代後半・土木) の計7人である。母親から見れば、共に無職の長女夫婦とその子ども、10代の娘の彼氏が同居し、次女夫婦は離れて暮らし、その子どもで

ある幼児とは同居しているのである。

また、以下に挙げるような家族における関係性の困難・不安定さも語られた。前節で紹介した20歳女性は、実父と生後2ヶ月で死別した。以下は、小学1年時に母親が再婚し、父親となった男性についての彼女の語りである。

(事例17) (父親が) すごい人間として嫌い。この人、人間として、私は受けつけへん。…小学校1年で再婚でしょう。…初めはよかったんですけどね、結婚して2年くらいは。…(再婚した父親の子どもが母親のお腹にできてから) もう360度変わったね、(父親の) 性格が。…中高はとりあえず嫌がらせ。私の大事してるもの勝手にほかしたりとか。すごいいろんなものなくされた。いろんなもの壊されて、金もとられて。その挙げ句には(母親が彼女の進学費用として貯めていた100万円を) 使い込みでしょう。お前、それでも父親のすることかって。ほんだら、あいつにしたら、「父親ちゃう」。それ言うたら終わりでしょう。…暴力とか普通にすごかったね。普通にあったね。…ほんまに嫌。1回本気で殴ったこともありますからね、父親。おかんがめっちゃ殴られて、顔面、グーで、おっさんに。もうそれを見た瞬間、われを忘れて、思いっきり飛ばして、本気で。めっちゃ飛んでいって、もうおっさんもぶちっと切れて、おかんも止めに入って。めちゃくちゃ。だから、円形脱毛症、私3回できてるんですよ、今まで。中3のときと高1と。めっちゃでっかいやつ、1回できて。高1の時かな。で、もう2ヶ月ぐらい家出て、幼なじみのうち…。離婚せい、離婚せいってずうっと(母親に) 言うけど、「せえへん」って。「妹らがかわいそう。あんたと同じ思いさせたくない」。[20歳・女性]

2歳で両親が離婚した16歳男性は、5歳からの数年間、母親が行方知れずになり、祖父母と暮らしていた。

(事例35) ちよっとま、オカンがおれへんかったんです。…【別々に住んではったとか?】俺はおじいちゃとおばあちゃんと住んでた。…5歳くらいから小学校の4年ぐらい。【小4の時にお母さん戻ってきたん?】探しに行っでん。パチンコ屋で働いてることは分かってたから、〇〇周辺のパチンコ屋におるって。【…(連絡なしで) ほんとにいなくなったん?】うん。【探しに行ったっていうのは、一人で?】ちゃう。おじいちゃんと。車持ってたから。【ほんなら見つけたんや?】うん。戻ってきて言うたら(戻ってきた) みたいな。[16歳・男性]

子どもへの暴力、DV、あるいはネグレクト。家族関係の様々な「しんどさ」が語られる。彼/彼女らが生まれ、育っていくことになる「環境としての家族」

とは、常態的貧困、深い貧困と特徴づけられる経済状況のみならず、様々な家族生活における困難、家族関係の不安定さをも内包した、重層化した困難を抱える家族であった。

### 3 低い学力／学校からの離脱—義務教育における排除

彼／彼女らはやがて、学齢期を迎える。重層化した困難を抱える家族に生まれ育った彼／彼女らの学校生活とは、いかなるものだったのか。以下は、2歳で両親が離婚し、一時期母親の行方知れずになったという16歳男性の、小・中学校時代についての語りである。

(事例35) (小学校は) 全然楽しくない。勉強がまず嫌いやった。…(嫌いな教科は) 漢字とか国語とか。【いつぐらいから嫌いに?】…もう入って、意味分かれへんかったから。…ムカついてた。…【授業中とかどうしてたん?】寝たりポーっとしたり、そんなマジメにせへんかった。…【先生嫌とかありました?】嫌いやった。【それは何でかな?】寝たら起こされるとか。【学校は毎日行ってたんですか?】小学校は毎日行ってた。…だいたい毎日、遅刻はなかった。【でも授業はよう分からん?】授業中はずっと聞いたふりみたいなんしてて。【学校の時間長いもんね。】長い。【苦痛じゃない?】暇で。【中学に上がったならより一層勉強わけ分からん?】もう、分からへん。【中学校はどうしてたん?】1年の時はだいたい行ってたけど、2年からはもう行けへんくなった。…行くのがダルなってきて(笑)。…3年はほとんど全く行ってない。…【成績は上中下でいうとどの辺?】一番成績は、なんか、アホやったから、最下位争うぐらい。[16歳・男性]

常態的貧困、深い貧困と特徴づけられる経済状況に生まれ育った若者たち、とりわけ家族関係に困難を抱える層においてしばしば、小学校低学年、あるいは入学直後という義務教育のごく初期の段階から、授業内容が分からなかったという経験が語られた。授業内容の分からなさ、不登校などの形で学校からの離脱と結びつきがちである。14人中7人に不登校経験があった。その多くが小学生時から始まっていた。

このような学校からの早期の離脱・脱落、その帰結とはいかなるものか。次の語りが端的に示している。

(事例26) 【学校行ってなかったら、どうなん、読み書きとか計算とか?】できへん。【漢字は結構辛いんちゃう?】うん、辛いね。【(調査の趣旨説明の用紙に) 振り仮名をちゃんと打ったらよかったな。】うんうん、打ったほうがいいね。…【苦勞するんちゃう、読み書き?】苦勞するよー。ひらがなで書いてーや。[16歳・女性]

学校からの早期の離脱・脱落、その帰結とは基礎学力すら身に付かない／奪われるという事態である。なぜ、そのような事態が生じてしまうのか。親の教育期待の低さ、親による学習援助の弱さ、下層の子どもの成功を阻害する学校教育のありようなど、様々な要因が考えられる。しかし、少なくともここで指摘しておかなければならないのは、例えば次のような事実である。16歳男性は、2歳で両親が離婚し母親と暮らすが、数年間母親の行方が分からず祖父母と暮らした。20歳女性の家族には、経済的に困難な状況に加え、再婚で父親となった男性の暴力・嫌がらせが日常的にあった。現在一人暮らしをしている彼女が、実家に帰ると父親は「フロ代40円」「飯代500円」を冗談ではなく要求してくる。そのような関係性の中で、彼女は中学1年からアルバイトをはじめ、「シャンプーから何かから何まで」自分で買っていた。つまり、彼／彼女らが学校での勉強に、あるいは家庭での学習に取り組もうとしても、それを可能とする家庭環境では全くなかったのである。

いずれにせよ、個人にとって環境としてあった生育家族の困難は、ここに至って、彼／彼女ら自身の低学力へと変換・移転されることになる。彼／彼女らが抱える困難は重層化していく。

#### 4 低い学歴達成

(事例35)【(中学3年生時)進路についてはどう考えてた?】普通に働くことだけ。【…学校の先生なり、お父さんお母さんなりに相談してた?】いや、そんなにしてない。ただ働きやって言われただけ。【誰に?】お母さんに。…高校行かれへんのは分かったことやから。【…高校に行くという考えはありました?】なかった。【全くなかった?】はい。[16歳・男性]

小学校入学直後から授業内容が「意味分かれへん」状態であり、中学2年から不登校状態にあった16歳男性は、中卒後の進路選択に関してこのように語った。また、生活保護受給の母子世帯で生まれ育ち、中学時代は「暇やったから」としばしば学校を抜け出して遊んでいた16歳女性は、高校を受験しなかった。その理由を尋ねると「勉強イヤ」とぼつりと答えた。

奨学金や授業料減免などの制度、さらにそもそも大学や専門学校に比べ授業料が格段に低額であることによって、高校、とりわけ公立高校進学に経済的困難が課す制約は、大学・専門学校進学に比べると小さい。「一定の学力」があれば、「昼間の高校」への進学は多くの場合可能である。しかし、その「一定の学力」すらない、あるいは奪われた若者たちが存在する。圧倒的多数の中学生が半ば当然のものとして進学する状況において、進学を「拒否」するほど学校や勉強に対する否定的感情を蓄積している若者たちが存在する。14人中5人は中卒でその学歴を終えた。大阪府で最終学歴中卒は、同世代の3%程度である。彼／彼女らは学歴的マイノリティの最下層に位置づけられる。

とはいえ、学力的には大きな困難を抱える層においても、「中卒はイヤ」「高校くらいは行かんと」という意識は強い。親や教師からの「せめて高校は出ておけ」という働きかけも強い。結果、14人中9人は高校に進学した。しかし、高校といってもその中身は多様である。偏差値、あるいはタイプによってそれらは階層化されている。高校に進学した9人中5人は定時制高校進学、1人は通信制高校進学であった。彼／彼女らが進学する／できるのは、階層化された学校、その底辺に位置づけられる高校に偏りがちである。

高校に進学した9人の内、3人は在学中である。1人は定時制高校を中退した。残り5人の内、卒業後に上級学校に進んだのは、後に中退するのだが、専門学校に進学した1人だけである。

耳塚寛明は、「いまや、高校から上級学校への進学は、威信の高い少数の四年制大学を別とすれば学力が決定的な重要性をもっているわけではない。むしろ、上級学校への進学に耐えるだけの経済力があるかどうか、進学を決める重要なポイントになっている」（耳塚、2001：100）と指摘した。次に挙げるのは、困難な経済状況に加えて、再婚で父親となった男性の暴力・嫌がらせが日常的にあったという20歳女性の語りである。彼女は大学への進学を希望し、高校の教師から「後はAO (admission office) 入試の面接を受けさえすればほぼ合格」と言われていたが、結局、進学しなかった／できなかった。

（事例17）（大学に）進学する気やったけど、…面接の日に、新幹線の中で寝ちゃって。色々考えてたら。お金の面とか、別に今、焦って行かんでもいいんちゃうとか。それはお金の問題が大きかったから。育英（奨学金）とか通っても、入学金とか何十万って先に払うのが、それは無理やわと思ったりとか。ほんなら寝ちゃって、降りなあかんのを通り越してしまって。遅刻やもうやめよと。そのまま大学入試に落ちてしまい、やめて。…ちょっとやっぱお金の面がしんどかったわ。……【お金の心配がなかったら…？】行ってた。間違いなく今、大学生やってた。……結構、複雑なあれ（家庭状況）やから。親に迷惑かけたないし。借金させてまでは行きたくないしなと思って。…そこまでして、行きたいと言ったら行きたいけど、別に自分がちょっと働いて貯めて、やろうと思えばやれるんやしとか。ほんなら、別に今、行かんでもいいわと思て。[20歳・女性]

「経済的理由により著しく修学困難な者」に対しては、奨学金などの制度がその学歴達成を支えることになっていたはずである。彼女は奨学金制度を知っている。大学進学への断念は、それを知った上でなされている。奨学金が振り込まれるのは入学後である。入学前に振り込む必要がある数十万円の入学金を用意できない経済状況がまずある。母親に頼めば、何とかそのお金を工面してくれたかもしれない。しかし、再婚した父親との劣悪な関係など、とりたててワガママとも言

えないこの願いを容易に口にできない家族の「複雑」さもある。彼女は「別に今、焦って行かんでもいいんちゃうか」と大学進学を諦めた。大阪府の2003年度高校卒業者の内、上級学校に進学しない割合は25%弱。今や最終学歴が高校卒である者は、同世代の中では少数派である。

生育家族における困難は、低い学力達成、早期の学校からの離脱へと変換され、「公正な選抜」を経由して、低い学歴達成へと帰結する。彼／彼女に学歴的マイノリティとしての困難が付加される。彼／彼女らが抱える困難はここでまた重層化することになる。

## 5 不安定就労層としての析出と滞留

学卒後、彼／彼女らは、学歴的マイノリティとして労働市場に参入することになる。ここではまず、男性対象者の職業的キャリアについて見ていく。

1人目の彼は、幼少の頃から、病気を患い無職である母との母子世帯で、経済的にも困難な状況の中で育ってきた。この16歳男性の職業的キャリアは次の通りである。進学できる高校は定時制しかなく、「そんなところ行っても絶対おもしろくない」、また早く働いて自分で稼ぎたいと考えた彼は、中学卒業後、進学せずに就職することにした。しかし、中卒の彼に正社員の仕事はなかった。中学校の教師が紹介してくれた仕事は、時給703円のタオル工場でのアルバイトだった。昼12時から夕方6時半までの週5日出勤で、1ヶ月働いたとしても8万円程度の収入である。彼はこの仕事を、同じ従業員から「なんか、アホにしている（バカにされる）」扱いや発言を受けたことを理由に、5日間で辞めている。その後、1年数ヶ月に及ぶ長期の失業を経験する。失業期間中、ファーストフード店や飲食店の調理関係、工場の作業員など、14～15回もの面接を受けるが、いずれも不採用となった。正社員ではなくアルバイトの面接である。そもそも15歳で応募できる求人は少なかった。該当する求人があり、面接までたどり着いても、「中卒がどーたらこーたら」と言われ不採用になる。学歴的マイノリティとしての彼らの職業的キャリアは、労働市場からの排除によって特徴づけられる。

数年間母親が行方知れずになったという16歳男性も、中卒後、タオル工場でのアルバイトを始める。しかし、彼もまた1週間そこそこで辞めている。その後、回転寿司、焼肉屋、ハンバーガー店、スーパーなどのアルバイト募集に「片っ端から」応募するが、いずれも不採用になった。5ヶ月間の失業期間を経た後、彼は母親と再婚した父親の紹介で父親と同じ派遣会社で働き始める。短ければ2～3日、長ければ1～2週間、派遣会社の社長と共に旅館などに泊まりながら、全国各地の工場で日給1万円のライン工として働く、そのような仕事である。5ヶ月間に渡ってここで働くが、父親が辞めたことで居づらくなり、この仕事は辞めた。その後、再び半年間の失業状態が続く。現在は卸会社で洋服や傘などを検品するアルバイトをしている。人材派遣会社に登録して見つけた仕事である。

父子世帯で父親は日雇の建設作業員やガードマンという20歳男性の職業的キャリアは、中卒後「ちょっと悪いこと」をして1年間入っていた少年院を出てから



始まる。少年院を出た彼は鳶として半年働くが、3ヶ月間の給料未払いの末に会社が倒産。その後、タイル屋で4～5ヶ月間働いた後、「ゴミ屋」（ゴミ回収業）に転職した。いずれも日給月給の仕事である。18歳で1歳年上の女性と結婚し、子どもも生まれる。結婚後も夫婦はそれぞれの実家に住み、子どもが生まれてからも妻の実家に通う生活が続く。給料は5千円の小遣いを除き、全額妻に渡していた。しかし、ゴミ屋の給料が手取り12～13万円と少なかったため、「副業」としてパチンコ屋や工場アルバイトをすることになった。こうして朝の7時半から深夜まで働くことになったのだが、彼は妻から「自分の相手をしてくれない」との理由で離婚を切り出される。父子世帯で育った彼は、「子どもがね、片親になるっていうのが僕はごっつ嫌やったから」と土下座をして考え直すように説得するが、妻の意志は変わらず、離婚するに至る。この頃、1～2年間働いたゴミ屋を、給料が同業他社より格段に安く、昇給もないこともあり退職。それから半年間は「気（が）すむまでちょっと遊んだらうか」と原付の修理で小遣いを稼ぎつつ無職で過ごしている。調査1～2週間前から、工場内での機械塗装のアルバイトを始めた。

学歴マイノリティとしての彼らは、職業生活への参入のスタート時点で、低賃金・不安定職種——階層化された労働市場の下層部分——に有無を言わずに組み込まれている。その職業的キャリアは、労働市場からの排除と、特定の不安定・低賃金職種への組み込みによって特徴づけられる。転職を重ねながらも就労し続けているケースがある一方、長期に及ぶ失業を経験しているケースも多い。いずれにも共通しているのは、安定した仕事の獲得が極めて困難な状況を滞留している／させられているということである。

彼らは、男性である自分が稼いで一家を支えるという家族観、性別役割観を強く持っている（西田、2004：127）。最後に挙げた20歳の彼が、副業を始め、朝の7時半から深夜まで、「死にそう」になりながら働いたのは、「嫁さんに、もっと仕事しいや」と言われ、それに応えようとしたからである。そうした就労への動機づけを持ち、そしてまだ十分に若い彼らの将来の職業達成には、無限ではないにしろ、かなりの幅を持った可能性があることは確かである。しかし、フリーターから正社員への移行は一般に困難であり、低学歴であることは、その困難をより一層大きなものにする（小杉、2003：8－11）。楽観的な将来を予想することは困難である。

また、彼らが語る将来展望は、例えば「プロ野球選手か、それともトラック運転手になりたい」といった、夢のような憧れと身近で現実的な展望の両極端で、「中間的な」職業モデルが不在である場合が少なくない（西田、2004：127）。学校からの早期の離脱・脱落、「地域の中に何日かおってみてください。ネクタイを締めたサラリーマンには出会わないですから」との語りにも端的に示される部落の職業構成上の偏り、これらは彼らの職業達成モデルを著しく狭める役割を果たしてきたと考えられる（内田、2005：196、西田、2004：127）。こうして限定さ

れた職業達成モデルがしばしば不安定さを内包しがちなものであることを考えると、楽観的な将来の予想はより一層困難になる。

## 6 不安定な家族形成——「ジェンダーの罫」

生活保護を受給している母子世帯で育った16歳女性は、中卒後、化粧品ケースにラベルを貼る仕事に就いた。しかし、4日で退職。その後、工場のライン作業、卸会社での梱包のアルバイトを始めるが、いずれも1～2週間で辞めている。現在までの1年間は仕事には就いておらず、求職活動も行っていない。

女性対象者の職業的キャリアも男性同様、低賃金・不安定職種への組み込みをその特徴として指摘できる。加えて、女性対象者に特徴的であるのは、16歳女性がここ1年間、求職活動なしの無業期間を過ごしていることに見られるような、就労への動機づけの希薄さである。

こうした傾向は、彼女らが抱くライフコース展望に大きく規定されていると考えられる。「早くに結婚したい」「専業主婦が理想」「若いお母さんになりたい」「相手はたくましい男の人」。彼女らが抱くライフコース展望を特徴づける語りである。低い学力達成、学歴達成、その結果として就労による地位達成が早期に閉ざされがちであること、そして彼女らの周囲に、彼女らが理想とするキャリアを実現したモデルとなる者が多数存在すること、逆に言えば、女性の職業達成モデルが非常に限定されていること、これらがそうした語りの背景としてあるのではないかと考えられる。いずれにせよ、彼女らの職業的地位達成（就労）への志向は弱く、早婚願望が強い。

山田昌弘は「女性にとっての結婚は、『生まれ変わり』の機能を持っている」（山田、1996：43）と指摘した。不安定就労、あるいは無業状態にある彼女らにとって結婚は、その相手が安定して高収入を稼いでいるなら、不安定な状況からの脱却（「生まれ変わり」）の契機となるかもしれない。しかし、彼女らの語りが示すのは「生まれ変わり」の困難である。

本節冒頭で紹介した16歳女性の彼氏（18歳）は、高校に「ちょっと行って」中退した後、彼女の実家に同居しながら建設作業員として働いている。

（事例24）【（彼氏は）どんな仕事してんの？】土木。…【A：なんぼ稼いでるん？】分かん。…でも、あんまもらってない。…（給料の支払いが）遅れてるけど。…【結婚しようとは思ってない？】うー分かん。【するかもしれない？】うん。…【A：彼氏、（24）に結婚しよっかとか言わへんかった。】言っとった。…【A：もしも赤ちゃんできたら結婚しよっかなあと思ったん？】（うなずく）[16歳・女性]

もう一人の16歳女性は単位制高校在学中で、パン屋でのアルバイトと内職の仕事をしている。19歳の彼氏は、同じ単位制高校に在学中で、彼女の実家に同居しながら、ペンキ屋とカタログ配達アルバイトをしている。「彼と結婚したい？」

と尋ねると、彼女は「うん、したい」と答える。

彼女らが付き合っている男性の多くは、学歴的マイノリティであり、また不安定な就業状態にある。そして、彼女らはまだ10代であるが、その彼氏と近い内に結婚する予定であったり、子どもができれば結婚しようと考えている。彼女らのきょうだい、友人・知人には、10代での結婚・出産という、彼女らが理想とするライフコースを実現している者が「当たり前」に存在している。彼女らがそうした「理想」を実現する可能性は決して低くない。しかし、経済的に困難な状況にある女性が困難な状況にある男性と結婚するのであり、彼女らにとって結婚が安定した生活への「生まれ変わり」を意味するとは考えにくい。むしろ、そうした家族形成は危うさをはらんだものとなる可能性が高い<sup>③</sup>。

『大阪府同和地区若年母子世帯実態調査結果報告書』（1997年）によると、若年（34歳未満）母子世帯の母親と前夫の学歴は、いずれもおよそ半数が高卒未満であった。彼女らは平均年齢20.6歳で結婚し、21.4歳で第一子を出産している。そして、多くは死別ではなく離別によって母子世帯となっている。

## 7 再生産を断ち切ることの困難

部落の若者、とりわけ経済的な困難を抱える家族に生まれ育った若者の生活史を積み重ね、フリーター・無業状態へと至る過程を描いてきた。描き出されたのは、生育家族に見られる様々な困難が、不利が不利を呼ぶ形でそこで生まれ育った彼／彼女ら自身の困難へと変換・移転され、それが重層化していく過程であった。それは親世代における困難、不安定、剥奪状況が、その子どもである彼／彼女らに世代を超えて引き継がれていること、社会的不平等が世代を超えて再生産されていることを意味する。

とはいえ、世代間再生産のプロセスは一切の例外なく、彼／彼女のこれまでとこれからを規定し尽くしているわけではもちろんない。

例えば20歳女性の事例である。彼女の生育家族は相当長期に渡って経済的に困難な状況にあり、母親の再婚によって父親となった男性をめぐって深刻な葛藤もあった。中学時代は授業に出ない時期もあり、高校進学についても「全く行く気なかったね」と語る。彼女はしかし、中学卒でその学歴を終えることはなかった。友人や教師、地域の人々の説得と支え、本人の努力によって高校に進学し、1年留年するものの卒業することができた。大学にも進学しようと考え、面接さえ受ければ合格という段階にまでいった。彼女の事例は、世代間再生産の悪循環を断ち切る、あるいは弱める可能性の存在を示唆している。彼女の場合それは、彼女自身が「波瀾万丈な人生やけど、人には恵まれてる」と語るように、友人や教師など彼女を取り巻く多くの人々の支えであった。

しかし、そうした人々の存在と彼女自身の努力によっても、悪循環を完全に断ち切るまでには至らなかった。既に見たように、彼女は、面接さえ受ければ可能であった大学進学を直前になって断念している。断念の理由は経済的問題である。大学進学を直前になって断念し、高校幹旋の就職ルートに乗れなかった彼女は、

高校卒業後、自ら見つけた浄水器の訪問販売員の仕事に就いた。朝9時から深夜までの長時間労働にもかかわらず、販売ノルマを達成できなかったとして初任給わずか7万円、そのような仕事である。その後、いくつかの仕事を経て、現在は実家を離れ、一人暮らしをしながらラウンジで接客の仕事をしている。彼女の事例は、困難が重層化していく悪循環を断ち切る、あるいは弱める可能性の存在を示唆するとともに、それが容易ではないことも同時に示している。

生育家族における困難は、彼／彼女のこれまでとこれからを規定し尽くはしない。しかしそれは、いかに困難な状況にあっても、努力さえすれば、機転と行動力があれば、困難は必ず克服できるという意味ではない。スタートラインにおける不利は、彼／彼女のこれまでとこれからの「確率的な力」として影響を及ぼす。何らかの対応がなされない限り、社会的不平等、貧困は世代を超えて再生産され続けるだろう。

### おわりに

近年、日本社会のありようを表現するキーワードとして「格差社会」「不平等社会」「下流社会」といった言葉が次々に生み出され、センセーショナルに論じられるようになった。しかし、そこで貧困、あるいは社会的排除が論じられることは依然として少ない。

日本では貧困の固定化や排除よりも、＜不安＞一般への眼差しが圧倒的に強い。…（略）…多数を基盤とした観念的平等主義が、かえって貧困や排除の存在そのものに蓋をしてしまうのである。／このため、格差問題は現実の貧困や排除としてよりも、「中流生活からの脱落」として提起されやすくなる。…（略）…中流からの脱落不安という視点は、マジョリティを基盤とするマスメディアや行政にとっても同調しやすく、そのため日本における格差問題はますます、希望や将来格差問題へと傾斜することになる。（岩田、2006：147）

「中流からの脱落不安」を煽る言説が過剰に流通する一方で、貧困や排除へのまなざしはあまりに過小である。フリーター・ニートについても、「豊かな社会を経てきた若年代のライフスタイルや＜生き方＞の問題、あるいはせいぜい格差拡大の過程にみられる中流層の＜不安＞の一形態という受け取り方」（岩田、2006：143）が根強く、貧困や社会的排除という視点は圧倒的に弱い。それは、例えばニート概念発祥の地であるイギリスにおいて、エスニック・マイノリティ、あるいは様々な困難が集中している旧産炭地などとの関わりで、若者の移行の困難が議論されている状況とは対照的である。本稿が描いてきた部落の若者たちは、現実の生活条件において社会のメインストリームから「排除」されてきただけでなく、社会的な問題関心からも「排除」されてきたのである（西田、2005：iii）。

同和対策事業というエンジンを外された現在、本稿が描いてきた部落の若者に見られる就労状況の困難さは、今後より深刻化する可能性が高い。

「90年代後半以降、景気局面に関わらず一貫して正規雇用者が減少する中で、非正規雇用は増加し続けるという動きがみられている」（内閣府「経済財政白書」平成18年度版：217）。こうした就労の不安定化圧力は当然のことながら部落にも及んでいる。しかも、そうした圧力は、既に指摘したように、相対的に低い社会階層的背景を持つ層に強く及ぶのであり、部落の若者は不安定就労へのより強い圧力に晒されていると見るべきであろう。さらに、同和対策事業によって底上げされていた親世代の就労状況は、事業終了に伴って不安定化傾向にある。また、同和向け公営住宅への応能応益家賃制度の導入によって「生活安定層の流出・生活困難層の流入」傾向に拍車がかかっている。これらの傾向は、部落における困難な家庭背景を持つ若者の増加と、不安定就労へと押し出す圧力の増大を意味する。さらに、これらの傾向は、部落の若者の地位達成モデルを一層限定されたものとするだろう（内田，2005：197）。現在進行しているのは、単なる社会的不平等の世代間再生産ではなく、拡大再生産と呼ぶべきプロセスなのかもしれない。

奥田が指摘する部落の就労実態における「再不安定化の予兆」は、何らかの取り組みがなされないままであるなら、予兆の段階を簡単に超えてしまうだろう。近年、政府によるニート・フリーター対策が進められつつあるが、貧困と結びついたニートやフリーターはそうした政策からこぼれ落ちる傾向にあることが指摘されている（岩田，2006：148－149）。困難な状況に置かれた若者たちをこぼれ落とさない有効な支援策とは、いかなるものなのか。少なくとも、固定化された貧困、蓄積された排除状況を生きる若者の姿を丹念に把握していくことなしに、それを見出すことはできないだろう。

## 【注】

- (1) 「大阪フリーター調査」は、被差別部落の若者27人を含む40人の若者を対象に、自由会話形式で、現在の就業状況、生まれ育った家族、学校教育経験などの生活史を聞き取った。その成果については、部落解放・人権研究所（2004、2005）を参照。本稿が対象とする大阪府内の被差別部落5地区の若者27人は、解放運動関係者からの紹介による。年齢は15～24歳、性別は男性14人、女性13人、インタビュー時間は一人あたり2時間前後である。
- (2) 一人親世帯の貧困については、例えば庄司（1997）を参照。
- (3) 彼女らが抱く「女としての幸せ」が困難な状況を導く事態を、「大阪フリーター調査」の共同研究者である西田芳正は「ジェンダーの罠」と呼んだ。

## 【参考文献】

- 岩田正美 2006年「バスに鍵はかかってしまったのか？——現代日本の貧困と福祉政策の矛盾」『思想』No.983
- 内田龍史 2005年「強い紐帯の強さと弱さ——フリーターと部落のネットワーク」部落解放・人権研究所編 2005年『排除される若者たち——フリーターと不平等の再生

産』解放出版社

- 奥田 均 2004年「2000年度大阪府部落問題調査から」『むこうにみえるは』第3号 NPO  
人権ネットワーク・ウェブ21
- 小杉礼子 2003年『フリーターという生き方』勁草書房
- 庄司洋子 1997年「ひとり親家族の貧困」庄司洋子他編『貧困・不平等と社会福祉』明石  
書店
- 橋本健二 2006年『階級社会—現代日本の格差を問う』講談社
- 西田芳正 1996年「不平等の再生産と教師—教師文化における差別性をめぐって」八木正  
編『被差別世界と社会学』明石書店
- 2004年『「遊び」世界と不平等の再生産』部落解放・人権研究所編『社会的に不利な立  
場に置かれたフリーター—その実情と包括的支援を求めて』
- 2005年『「排除される若者たち」とは誰か?』部落解放・人権研究所編 前掲書
- 部落解放・人権研究所編 2004年『社会的に不利な立場に置かれたフリーター—その実情  
と包括的支援を求めて』
- 2005年『排除される若者たち—フリーターと不平等の再生産』解放出版社
- 山田昌弘 1996年『結婚の社会学—未婚化・晩婚化はつづくのか』丸善
- 2001年『家族というリスク』勁草書房
- 耳塚寛明2001年「高卒無業者の漸増」矢島正美・耳塚寛明編『変わる若者と職業世界—ト  
ランジションの社会学』学文社
- 2002年「誰がフリーターになるのか—社会階層的背景の検討」小杉礼子編『自由の代  
償／フリーター—現代若者の意識と行動』日本労働研究機構

(つまき しんご：日本学術振興会特別研究員)